

教養研究センター基盤研究講演会 no.11

オウム真理教事件を通じて現代社会を見る

—「抑圧されたもの」の回帰のように

日時：2025年6月4日(水) 18:10~19:40

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペース

ちょうど30年前にオウム真理教団によって引き起こされた地下鉄サリン事件は、宗教的な集団が「先進国」の都市の真ん中で引き起こした無差別テロとしては、世界で初めての出来事であった。このとき、世界中の人は「こんなことが起きるのか」と驚いたのだが、その後の短い歴史を振り返ると、2001年の911テロをはじめ、アメリカやヨーロッパの大都市では、いわゆる原理主義者たちが何度もテロを引き起こしてきた。オウム真理教によるテロは、21世紀の政治・宗教的現象の予兆のようなものであった。有名大学の学生や出身者等の知的エリートをおもなメンバーとしていた教団が、どうしてあのようなテロに走ったのか。オウムの終末論的な世界観、彼らが希求した(人間)関係のあり方などを検討すると、奇妙なことに気づく。インターネットの大衆的普及の前夜の日本の社会的・文化的な状況がわかるだけではなく、今まさに国際社会を舞台にして起きていること(たとえばトランプ現象)の本性的が見えてくるのだ。現代社会で起きていることは、「オウムのなるもの」の、幻想の内容としては希釈された、しかし社会的な規模としては大幅に拡大された、(意図せざる)回帰のようなものとして解釈できる。

講師：大澤 真幸
社会学者

司会：片山 杜秀
慶應義塾大学教養研究センター所長・法学部教授

6月4日(水)
18:10~19:40
日吉キャンパス来往舎 1F
シンポジウムスペース

無料・予約不要
対象：研究者、教職員、関心のある学部生・大学院生

「抑圧されたもの」の回帰のように
オウム真理教事件を通じて現代社会を見る

大澤 真幸
Masachi Osawa

プロフィール
1958年長野県松本市生まれ。慶応大学大学院社会学研究科、社会学士。千葉大学大学院社会学研究科、社会学博士。千葉大学文学部助教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授等を歴任。現在、慶応義塾大学「O」文化センター「行為の代数学」(青土社)、『身体の比較社会学』(勁草書房)、『増補 虚構の時代の果て』(ちくま学芸文庫)、『不可能性の時代』(岩波新書)、『ナショナリズムの由来』(講談社、毎日出版文化賞)、『ふしぎなキリスト教』(橋爪大三郎と共著、講談社現代新書、中央公論新書大賞)、『自由という牢獄』(岩波書店、河合隼雄学芸賞)、『社会学史』(講談社現代新書)、『〈世界史〉の哲学』シリーズ(講談社)、『西洋近代の罪』(朝日新書)等、著書多数。

主催：慶應義塾大学教養研究センター 問合せ：tsawawa-06@adit.keio.ac.jp

講師略歴

大澤 真幸 (社会学者)

1958年長野県松本市生まれ。東京大学大学院社会学研究科卒。社会学博士。千葉大学文学部助教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授等を歴任。現在、個人思想誌『Thinking「O」』(左右社)主宰。

著書

『行為の代数学』(青土社)、『身体の比較社会学』(勁草書房)、『増補 虚構の時代の果て』(ちくま学芸文庫)、『不可能性の時代』(岩波新書)、『ナショナリズムの由来』(講談社、毎日出版文化賞)、『ふしぎなキリスト教』(橋爪大三郎と共著、講談社現代新書、中央公論新書大賞)、『自由という牢獄』(岩波書店、河合隼雄学芸賞)、『社会学史』(講談社現代新書)、『〈世界史〉の哲学』シリーズ(講談社)、『西洋近代の罪』(朝日新書)等、著書多数。

オウム真理教事件を通じて現代社会を見る

—「抑圧されたもの」の回帰のように

社会学者 大澤 真幸

片山 (司会) 皆様、本日はご来場いただきありがとうございます。私は、教養研究センターの所長を務めております、片山でございます。

教養研究センターでは「基盤研究」と銘打ちまして、「教養とは何か」を教養研究センターが研究するという基盤研究を、前所長の小菅先生が立ち上げられました。それを私が継続しているわけです。近年は宗教をテーマにして何度か連続の講演会をやらせていただいているわけですが、新興宗教やカルトの問題なんかも触れながら、大きいお話をさせていただく回があってもよいと思い、大澤先生にちょうどお願いできるようなタイミングがございましたものですから、オウム真理教の事件から30年という時期で、これは大澤真幸先生おおさわ まさちかに来ていただいて、一応この基盤研究のテーマの枠内のことにもなりますので、お話しただくのに格好の時期ということで、お招きさせていただきました。

大澤真幸先生は私がお紹介するまでもないと思うのですが、日本を代表する社会学者であられ、膨大なご著書があり、それは驚くべき分厚さのものや、内容も分厚さにびっくりするようなご著書を、「たくさん」お出しになっておられます。お若い頃からお読みになっておられる方も、本日来ていただいているかと存じます。

では、大澤先生、本日はよろしくお願ひ申し上げます。

大澤 どうも大澤です。本日はお集まりくださりましてありがとうございます。

今、片山さんから紹介がありましたが、本日はタイトルにありますようにオウム事件のことを話します。ちょうど今年がオウム事件があった1995年から、30年に当たる年なのですね。

ただ、「オウム事件がこんな事件だったよ」「オウムってこんなだったよ」ということを言うのではなくて、この後半「現代社会を見る」というのがポイントになっていて、オウムというのを1つのフィルターに使いながら、現代について考える。この場合の「現代」というのは、後で話します「トランプ現象」ですけども、とにかく入りましょう。

まず、念のためにというか、これは1995年3月20日「地下鉄サリン事件」の現場です。学生さんたちは、多分この事件よりも後に生まれているのですが、この事件のこと自体はご存じですよ。初めて知ったという人はいらっしゃるでしょうか。それはいいね、さすがにね。

皆さんの生まれる前の人も結構多いと思いますけれども、この日、もし思春期、10代の前半ぐらい以降にこの事件を少なくとも東京というか首都圏で体験していれば、まず一生忘れない出来事ですね。本当にびっくりしたのです。

これは1995年3月20日の通勤時間帯です。まさに最も混んでいる時間帯の東京の地下鉄、3つの路線に、通勤時間帯の満員電車で、「オウム真理教」という、今でも名前を変えて残っていますけれども、教団のメンバーが、毒ガス、その前の年の「松本サリン事件」からですけれども、「サリン」というものを普通の人は知らなかったのですけれども、「サリン」という毒ガスをまいて、非常に猛毒で、実際には6,000人以上の人が被害を受け、実際に亡くなった人も十何人もいるという、大惨事になったのです。

そのときの驚きとか不安というのは皆さんに伝えるのが難しいのですが、まず思ったことは、こういうことはフィクションや漫画には出てくる。でも、本当に現実に起きるんだということに、非常に驚きました。

この1995年は、日本人ならずともこの事件のことを考えていて、その前に阪神淡路大震災もあった、そちらも重要な事件ですけれども、とにかくずっとこのことばかりを考えているような1年だったのです。これでオウムの犯罪であるということになって、後から振り返ってみると、そのほかにもいろいろな犯罪をしているということが分かったのです。

例えば、私にとっては非常に重要なのは、先ほど言いかけてはいたけれども、その1年前の94年6月に「松本サリン事件」というのがあった。

私は松本の出身で、「松本サリン事件」の現場は、実は私、よく知っている場所というか、幼いときから遊びの範囲に入るぐらいの近さだったので、非常によく覚えているのです。

今、振り返ると、「松本サリン事件」が起きたときは、

ご存じの方が多いかもしれませんが、河野さんという人が冤罪というか間違っただけで逮捕されたぐらいだから、誰が犯人か全く分からなかったのです。

今、いつ頃からオウムが警察の捜査線上に浮かんできたかみたいなことの検証がいろいろ進んでいますけれども、いずれにしても普通の人は、そのとき、夢にも思わなかったし、僕も自分のふるさとの、両親もまだ当時生きていましたから、すごく不安でした。そういうことを誰がやったか見当がつかないです。

「松本サリン事件」は、そこに近くの裁判所の官舎があって、その裁判所の官舎にある裁判官を狙ったテロだということが後で分かるのですけれども、やがてオウムのものだと。こういう形で、とてつもない事件が起きたのです。

ただ、これからそのことを少しずつ丁寧に話しますが、僕は、変な話ですけれども、2016年に1回目に当選して、今年2度目の当選をしたトランプを見て、デジャヴ感があるのです。何か想起させるものがある。それと、ただの思いつきということではなくて、根拠もあります。

もちろん当たり前のことですが、オウム事件のことを知っているわけではないし、側近だって恐らく知らないでしょう。だから、それに影響されるとか、そういうことは全くありませんけれども、でも、社会の通底する精神の動きとか、社会の動きみたいなものと何か連動するもの、類似のものがあるのです。

まず、こういうことから入りましょう。先ほど言ったように、このオウムによる地下鉄サリン事件が起きたときに、日本人だけでなく世界中の人が、「これは空前絶後だ」と思ったのです。というのは先ほど言ったように、これは普通の、いわゆる比較的豊かな治安のいい都市のど真ん中で、しかも宗教的な教団が、本人たちの主観的な意識としては一種の宗教的な理由によってテロを起こすと。どこか紛争地帯であるとか、グローバルサウスみたいなところで、治安があまりよくないみたいところで起きるといことは幾らでもあったわけですが、先進国の都市部の真ん中でこういうことが起きるといことはちょっと予想していなくて、今後も絶対起きないような、孤立した出来事だと思ったのです。

ところが、21世紀になってみると、ある意味で似たようなことが、似たようなことと言うのも変ですが、起きる。つまり、先進国の都市の真ん中で、宗教的な理由によるテロというのが起きるようになったのです。一番有名なのは2001年9月11日のニューヨーク「9.11テロ」です。

僕はこれのときも、直ちにオウム事件を連想しました。

オウム事件は日本人はよく記憶していても、ほかの国の人には忘れていたかもしれません。だから、ほかの人にとっては、これ自体が不意打ちですけれども、我々日本人から見ると「こういうことがやっぱり起きるんだ」と。

その後、これが一番すごいことですが、頻繁にとまでは行きませんが、21世紀になってから、結構、先進国の都市の真ん中で、大抵これは「イスラム原理主義」と言われている人たちですけれども、宗教的な教団が、宗教的なグループがテロを起こす。

ロンドンのこれも地下鉄ですね。それから、これはご存じの「シャルリー・エブド」。この同じ2015年には、秋とか冬に近づいたときにも、パリで同時多発テロがあったり、とにかくこういう形のものが、しょっちゅう起きるわけではないですが、起きてても不思議ではない出来事になったのです。だから、今考えてみると、オウム事件というのは「空前絶後」というよりも、これから起きることの予告というか、予言というか、予兆というかそういうものであったことを感じます。

だから、そういう意味でいうと、あのとき起きたことが、その後、起きてきているということに、何か少し必然性があるのを感じるでしょう。

例えば、僕が一番「地下鉄サリン事件」と似ているなと思ったのは、「9.11テロ」なのです。つまり、言ってみれば、「地下鉄サリン」事件だって、とてつもない出来事だと思いましたが、それをさらにスケールアップしてというか、地下鉄ではなくて飛行機を使う。

後でちょっと話しますが、オウム真理教の拠点というか、ベースになっていた場所は、今はそういう市町村はなくなってしまいましたけれども、山梨県の上九一色村という、非常に寒村なのですが、そこから中央高速で東京まで突っ走ると1時間半ぐらいで都心まで来れるのですけれども、非常に過疎地からやってきているわけ。それに対してアルカーイダは、アフガニスタンのもっとすごい過疎地からやってきていると。

それから9.11のほうは自爆テロです。オウム真理教は自爆テロではなかったのですけれども、とにかく、1つスケールアップして反復されていると、そういう感じをしたのです。

まず、そういうことを念頭に置きながら、この「オウム現象」から現代を考える、あるいは21世紀を考えるということなのです。

先ほど言った、まず「トランプ現象」を見たときに、オウム真理教を連想させるってどういうことかということ

先に、幾つか丁寧に話します。

2人の写真ですけれども、僕はまず思ったのはこういうことです。

皆さん、例えばトランプという大統領が出てきたときに、どう思われましたか。彼は今、世界で一番権力と権威のある地位に就いているわけですけれども、トランプをめぐる現象というものを考えると、そこには権威というものの持っている通常の論理とは全く違うことに気づきます。

それはどういうことかという、例えば、これも皆さんすごく感じていると思いますけれども、トランプはしょっちゅう間違いをしたり、不適切なことを言ったり、とんでもないスキャンダル、性的なことも含めていっぱいあるわけです。普通の政治家であれば、そのうちの1つでもあれば、100%政治生命を絶たれるのですね。ところがトランプは、幾つあっても絶たれないのですよ。それどころか、そういうのが出れば出るほど、人気が出ているのではないか、支持者の熱狂的な支持はますます高まっているのではないか、そういう感じですよ。

皆さん御覧になるか分かりませんが、例えば、アメリカには意識高い系のコメディアンというのがいて、結構、政治風刺みたいなことをコメディでやるのです。そうすると大抵、それが普通の政治家だと、コメディアンが嘲笑の対象にすると、みんな笑って、「いつも偉そうにしているけども」とか何とかって、例えばクリントンのことを何とかとか、幾らでもできるのですけれども、トランプのことを嘲笑すると、「ほんもののトランプのほうが面白いぜ」みたいなことになってしまうのですよね。幾らトランプをばかにしても。

というのはつまり、どうしてそうになってしまうかという、トランプというのは考えてみると、半分、自分自身を戯画化しているのですよね。自分自身の中に既にアイロニーが含まれているというか、自己風刺しながら生きていくみたいな。だからそれをコメディアンが風刺しても追いつかないのですよ。そういう奇妙な権威の在り方というのが出てくる。

麻原彰晃についても実は同じです。「地下鉄サリン事件」があった年に、率直に言うと恐らく、普通の報道もそうですけれども、いわゆるワイドショーのほとんど、9割ぐらいの時間を、1年ずっと、オウム事件に使っているのですね。そこで、もちろんとんでもないこと、犯罪をしているし、反社会的な集団そのものですから、厳しく評論家みたいな人たちが批判するわけです。そのときに、麻原彰晃を批判するときに一番よく使われた言葉が「俗物」という言

葉です。これは、一番よく使われた言葉ではないかなと僕は思います。

これは、麻原彰晃というのはいかに偉そうな宗教的な格好をしていても、俗っぽい人間であるかということいろいろ言うわけです。でも、「俗っぽい」といっても、麻原彰晃の「俗っぽい」ですから、スケールがトランプに比べれば大分小さいのですのですけれども。

例えば、有名で覚えているのは、信者になって出家をすると、結構、禁欲的な生活を強いられるのですけれども、「麻原彰晃はこの間ものすごく豪遊していた」「どこで豪遊していたの」「ファミリーレストランで」みたいな話のだけれども、「ファミリーレストランでたくさん食べた」、あるいは「信者には禁じているメロンが大好きらしい」とかね。そんなに大した話ではないのですけれども、でもとにかく、「偉そうにしているけれども俗物だ」ということがいっぱい言われるわけ。

性的なことも言われました。例えば、信者の女性と何人が関係があったり、子どもがたくさんできたりとか、そういうようなことを言われたり。一番言われたのは金銭的なことです。これはよくあることですけれども、教団に入るときに、この間の統一教会に比べれば金額は大分少ないですけれども、でもあのときも、信者になったときにお金を寄附したりするでしょう。そういうこともあったので、すごく金に汚いのだとかということで、非常に俗物だと。

これで評論家たちが言いたかったのはこういうことなのです。これも皆さんもよく知っていると思いますけれども、オウム真理教というのは、ちょうど今の皆さんぐら이의比較的年齢の若い人たちが中心だったのです。僕は当時、今の皆さんよりはちょっと上で30代の中盤ぐらいだったのですけれども、麻原彰晃は別として、オウム真理教の一番年齢の高くて古くからやっている古参の幹部クラスというのが、大体、僕と同じ年齢だったこともあり、僕はすごく興味を持ったのです。

ともかくそういう若い人たちで、しかもエリートの大学とか、大学院卒業とか、そういう人たちがいっぱいいるわけですよ。そういう人たちに対して評論家たちは呼びかけているわけ。「麻原彰晃なんて」「目を覚ましなさい。あれはただの俗物だ。そんな立派なものじゃない」と、そういうふう呼びかけているわけです。

しかし、こんなこと幾ら呼びかけても効かないのですよ。なぜかというのは、よく考えてみると当然なのです。例えば「麻原彰晃がメロンを食べていた」「ある女性信者と何らかの関係がある」とか、それを一体その評論家たちはど

うやって調べて、どうして知っているのか。信者に聞いて知っているに決まっているのですよ。つまり信者はみんな、そんなことは知っているのですよ。だから、信者はそれを知っていて麻原彰晃に帰依しているわけですから、ちょうどトランプの場合と同じで、非常に俗っぽい、オーラを普通だったら削りそうな過ちや性質を、幾ら言ってもそのことによって、かえって信者が帰依するようになる。そういうメカニズムがこの麻原彰晃にもあったわけです。

例えばトランプだったら非常に失言が多いわけです。とんでもないと思うわけですがけれども、そのほうが支持者から見ると本当っぽく見える。つまり彼が「我々と同じ」「作り物ではなく、本物の人だ」みたいな印象を与える。

麻原についてもそうです。いろいろと普通の人間の欠点がいっぱいあるわけです。そのほうが本当の人というか、正直な人で、かつ、しかもむしろ親しみがあってという感じで、ますます人気が出る。そういう感じなのです。だから、トランプという人を見ていると、スケールアップした麻原彰晃をちょっと思うようなところがあるのです。後でもう少し、トランプ現象とオウム現象が似ていると理由を話しますけれども、以上のことを、先に言っておきます。

オウムに関して言えば日本ですから、グローバルで見ればすごく大国というほどではない国の、しかも片隅、当時1万人ぐらいの信者がいると言っていました、それは本当かどうか分かりません。ただ、何千人かは確実にいましたね。そういう世界の片隅で起きている。それに対してトランプは、世界で一番の大国の、世界で一番トップですから、全然違うといえば違うのです。

ただ、こういうことをまず言っておいてもいいと思う。彼らオウム真理教からすると、先ほど言ったようにテロを起こしているわけです。「そんなこと何でやっているの」となるわけで、いろいろ普通に聞いてみると、あまりよく分からない理屈になってしまうのですけれども、彼らとしては「自分たちこそ迫害されている」ということになっているのです。誰に迫害されているかという、多分、日本政府とか、その後ろにいるアメリカだとかCIAとか、そういうのに関係しているということになっているのですけれども、ともかくそれに対する反撃であって、オウム真理教にとっては一種のクーデターのテロというか、革命のイメージ、反体制運動なのです。

トランプの場合は、既にアメリカの大統領になっていて、政権を取っているわけです。

ただ、皆さん、こう思いませんか。トランプ政権というか、トランプたちはこういう感じがするのですよ。今考え

てみると、言ってみれば、あなた方が権力の中心にいるわけではないですか。でも彼ら、常に「自分たちは反主流派だ」と思っているのね。反体制運動のノリなのです。お前以上の体制はいないはずなのに、反体制。例えば、イーロン・マスクが政府効率化省とあって、言わば体制側の政府をやっつけようとしているわけでしょう。

野党のときは反体制と一応言えなくもないけれども、今、政権取っても常に反体制運動みたいな感じなのです。

さらに言えば、これはトランプが負けたときのことで、これは、皆さんよく知っている事件です。2021年1月6日のバイデンが当選したときですけれども、アメリカの議事堂をトランプ支持者が襲撃した。

例えば「地下鉄サリン事件」のターゲットは何だったのかということを見ると、先ほど言ったように、都心に集まる。一番のターゲットは霞が関なのです。つまり日本のトップの官僚、あるいは政治家、あるいは企業のエリート、とにかくそういう、特に霞が関です。それを狙うテロだった。そのことを考えると、例えばこれはトランプが落選したときですけれども、言ってみれば「地下鉄サリン事件」をちょっと連想させるものがあるではないですか。

これから「オウム」と「トランプ現象」を往復しながら現代を考えていくみたいなことをやるのですけれども、どうして僕が何となくこの2つの間に、ある種のつながりみたいなことを感じるかという、つながりという、連想させるアナロジーを感じるかということ、もう少し話します。

まず、オウム真理教のほうから行きますと、彼らが何でテロをしたかということとも関係あるのですけれども、オウム真理教の基本的な教義というか、教義というべきものの中で一番、少なくともこの行動に関係するのは、彼らは教祖の麻原彰晃の予言に基づいて、世界の終末が近づいていると思っているわけです。もうじき世界最終戦争が行われて、世界の破滅に近いことが起きて、その中から生き延びるエリートがいるわけですが、そういう構図で考えているわけです。

これは知っている方が多いと思いますけれども、オウム真理教の建前上とか一応そうなのですから、伝統宗教との関係でいけば、一応、仏教系ということになっているのです。仏教といってもチベット仏教みたいな、密教とかそういうものの関係ですが、それなりの知識をもちろん麻原という人は持っていて、それなりに人を説得する力もあるのです。

ただ、仏教には世界終末の戦争なんてないです。それは

どこから来ているかという、キリスト教です。よく皆さん知っている「ヨハネ黙示録」に、これはどうですかね、いろいろなものに出てきますから、「ハルマゲドン」というやつですね。

「ハルマゲドン」というのは、世界最終戦争の代名詞として使われる言葉ですけれども、本当は場所の名前です。例えば「関ヶ原」と僕らは言って、「天下分け目の関ヶ原」、最後の重要な決戦のことを「関ヶ原」と言うのではないですか。それと同じです。最後の「ハルマゲドン」。一応聖書に書かれている「ハルマゲドン」が行われたとされている場所がここなのですけれども、いずれにしても「ハルマゲドン」が近づいているということ、麻原彰晃は、一応彼らの説明によれば、「ヨハネ黙示録」を研究してみると「ハルマゲドン」が近づいていることは確かだと。それは予言の時期によって、つまり彼が言う時期によって、最初は2005年頃とか2004年、だんだんと遡ってきて、「地下鉄サリン事件」が近づいていた頃には、1997年に「ハルマゲドン」が起きることになっていたりするのですけれども、だんだん切迫してくるのです。そういう話。だから、仏教系だけキリスト教の部分をそれだけちょっと入れているのです。

皆さんどうですかね。「ハルマゲドン」と言ったときに、例えば皆さんのごく普通のというか、つまり、サブカルチャーの1つの流行のテーマでもあるから、多くのものが世界最終戦争に直接・間接的に関係あって、「ハルマゲドン」なんて言葉もよく使われているのですけれども、皆さんはどうですかね。それは普通に使う言葉ですかね。ちょっと分からないけれども。

でも「ハルマゲドン」と聞いて、「アルマゲドン」とか、そういう映画もあったりしましたから、どうですか。知っているものですかね。分からないですけど。でも、世界最終戦争っぽい話は今でもいっぱい書かれていますよね。「進撃の巨人」だってそんな感じではないですか。

1970年代の中盤ぐらいから「ハルマゲドン」というのは、一種の大衆文化の中で非常に流行のテーマでもあったのです。漫画やSFみたいなものに出てきたり、あるいはオウムと同じように、オウムは1984年につくられたのですけれども、1970年代ぐらいから出てくる多くの新興宗教が世界の終末について言っていて、「ハルマゲドン」という言葉を使っていましたから、特に「ヨハネ黙示録」を勉強しなくても、自然と流行に乗っているだけというところはあります。

ただ、私がある当時、先ほど言ったようにオウム真理教

事件にすごく興味を持って、それについても私は当時、本を書きました。それでいろいろと信者にも会ったり、いろいろな話を聞いたり、いろいろ調べたりしましたけれども、オウムの終末論自体は、先ほど言ったようにかなり流行のテーマで、漫画や何かにも幾らでも取り上げられていますけれども、ちょっと特徴がありました。

まず、簡単に言うと「暗い」。もちろん暗い話ですよ、世界の最終戦争だから。ただ、その破滅の度合いが強烈なのです。つまり一般よりも、普通に言われているよりも、例えば「生き延びる率」みたいな、そんなこと勝手に言っても分からないのですけれども、「ほとんど生き延びないんじゃない？ ほんのわずかですよ」という感じで、非常に破局が厳しいです。

それからもう1つ重要な特徴があって、「ハルマゲドン」というのは例えば、キリスト教ですから、後でちょっとだけ話しますけれども、キリスト教の場合、大抵皆さんご存じだと思いますけれども、最後の審判があって、そして救われる人は神の国、天国に行くわけです。だから、天国という最後のユートピアに行く前に、キリスト軍と反キリスト軍の戦いがあつたりするらしいのです。だから、「ハルマゲドン」の後にユートピアが来る。だから、選ばれている人にとっては、その後、救いが待っているわけです。

オウム真理教の場合も、もちろんそうです。「『ハルマゲドン』でみんな死んでおしまいです」と言っているわけではなくて、その後、自分たちを含む、自分たち、ちゃんとした信者が核になったユートピアが来ることになっているのですけれども、結論的に言うと、そこが肝心の最終的な目的であるはずなのに、そのユートピアについてのイメージが著しく乏しいのです。具体的にどんなものが来るのかほとんど分からない。

「ハルマゲドン」についてはしょっちゅう、ものすごく言葉を尽くして言われているのだけれども、終わった後どうなるの、私たちは生き延びるの、生き延びた人たちはどういう人たちの、生き延びた後何が起きるのということについては、「すばらしい世界が来る」みたいな抽象的な言い方しかなくて、ほとんど内容がないのですよ。

そうすると、僕はやっているうちに思いました。この人たちは、自分ではどう思っているか、自覚しているか分からないけれども、本当はその後のユートピアを求めているのではなくて、「ハルマゲドン」自体を求めているのですよね。破壊のプロセス。

考えてみると、もしかするとテロ自体が「ハルマゲドン」の一部なのかもしれないのです。こっちから見ればと

というか、当たり前ですけれども、勝手に先制攻撃ですけれども、オウム真理教の人たちはかなりの迫害妄想を持っていましたから、「自分たちはむしろ自衛のために防御しているのだ。既に『ハルマゲドン』の戦いは始まっているんだ」みたいなイメージではないかなと思うのです。

とにかく、ものすごく率直に言うところ『ハルマゲドン』が来ると思うと心躍るぜ」という、そこまで言うと言い過ぎかもしれないけれども、ちょっと興奮しているのですよ。「わくわく。いよいよ『ハルマゲドン』だ」みたいな。もちろんその後、自分たちが生き延びることになっていなければそう思えないでしょうけれども。とにかく本当に求めているのは、「ハルマゲドン」の後にやってくるユートピアよりも、まずは何と言っても「ハルマゲドン」そのものなのです。破壊のプロセス自体を求めている。破壊のプロセス自体に魅了されている。そういう極めて破壊的な、否定的な性質の終末論です。

考えてみると、当時、麻原彰晃という人は、自分はシヴァ神の化身であると言っていました。これもいろいろな解釈があるのですが、普通の教科書的なことを言うと、ヒンドゥー教には重要な神が3人いるのです。ブラフマーとヴィシュヌとシヴァ神という3人がいて、何で3人かということ、分担があるわけです。ブラフマーというのが創造、創る、クリエーションですね。ヴィシュヌというのは、できたものを維持する。シヴァ神というのは、破壊の神様なのです。

先ほど言ったように、仏教系でインドとかそういうのがあるので、そういうものを混合しながら教義をつくっているわけですが、その中のシヴァ神を選んで、麻原は、自分はシヴァ神の化身だと。つまりそういう意味で、破壊そのものが非常に重要な意味を持っている、そういうことをまず言うておきます。

さて、僕は先ほど言ったように、何で麻原、「オウム現象」と「トランプ現象」がすごく類似していると思ったかということ、実は今言った、この終末論に関係あるのです。

結論というか、これから少し説明いたしますけれども。というのは、あまり日本の報道の中できっちりたくさん書かれていないので、ちゃんと説明しますが、「トランプ現象」というのは、ある種の終末論と非常に結びついているのです。

つまりどういうことかということ、トランプの支持者、側近、ブレイクのような人たちの中に、終末論的な思想を持っていたり、あるいは終末論に近い感覚の人というのかな、持っている人が、非常にたくさんいるのです。

考えてみれば当たり前というところもあるのです。なぜかということ、先ほど言ったように、キリスト教は普通、基本、終末論なのだから。アメリカというのは世界のキリスト教国ですからね。しかもトランプは、ご存じのように福音派という非常に熱心なキリスト教の集団によって支持されているわけだし、彼らはクリスチャンですから、ある意味、終末論は常識といえば常識なのです。よく見ると、確かにそうなのだけれども、トランプ周辺の終末論は、そういうずっとキリスト教の国だからね、というのには、ちょっと尽くされない雰囲気がある。

どういうことかということ、トランプ支持者は大きく分ければ、これは皆さんも感じているし、いろいろなところにも書かれていると思いますけれども、ざっくり言うと2種類の人が一緒になっている感じがあるわけです。この2つがどうつながっているかが重要ですが、あるいは本日は話すことも少しそれに関係ありますが、1つは今言った、「ポピュリズム」と言われるときに念頭にあるような、白人の中産階級で、すごく裕福とは言い難い人たちで、そういう人たちの中に、先ほど言った福音派の信者たちと近い関係にある人、たくさんいるわけです。それは非常に重要な支持層になっているのはご存じです。

しかし、それとはまた違うタイプの人たちがいる。それはイーロン・マスクを見れば明らかです。どう見たって貧乏な白人ではないじゃないですか。つまりテクノ・エリートとか、そういうIT産業に関わる投資家であったり、そういうものの経営者であったりするような超エリート人。こういう人たちは、人によりますが、どっちかといえばキリスト教の敬虔な信仰とかということと、本当はあまり関係ないのです。福音派ではないから。

でも、これから言いますが、トランプの周辺にある終末論というのは、キリスト教系の人よりも、今言ったテクノ・エリートたちのほうこそ、主にイニシアチブを握ってリードしているという感じなのです。彼らの中に、ある意味での終末論があるのです。彼らの「現代風終末論」が、伝統的なクリスチャンの持っている、「私たちが終末論です」というのとシンクロしているみたいな、そういう感じなのです。そのことを少しこれから説明します。

これは私、皆さん興味があれば読めばいいと思うのですが、本日のかなり重要なネタ元になっていますけれども、ナオミ・クラインという人を知っていますか。ナオミ・クラインというのは、ジャーナリストということになるのですかね。一番有名な本は『ショック・ドクトリン』という本があって、これは翻訳されていますけれども、私

はそんな、本当はナオミ・クラインという人をそんなに高くは評価していないのですけれども、でも「ショック・ドクトリン」というのは、災害に便乗してもうけている悪徳資本家がたくさんいるぞ、みたいな話なのですけれども、そういうナオミ・クラインと、それからアストラ・テイラーという人だね。アストラ・テイラーというのはドキュメンタリー映画の作家らしいのですけれども、この2人が「ガーディアン」という有名なイギリスの新聞に、ものすごく長文の「ザ・ライズ・オブ・エンドタイムズ・ファシズム」という論文を寄稿しています。エンドタイムズ、つまり終末のときのファシズムということですが、「トランプ現象」についての評論です。ここに、トランプ支持者、トランプという現象の中に、終末論というのがどれだけ深く浸透しているかということが書かれていて、なかなか面白いので、それを基にしながらかちょっとお話しします。

いきなり終末論と関係なさそうな話から入ると、例えば中南米、ホンジュラスを知っていますね。ホンジュラスの小さな島に、「プロスペラ」という、これは人工都市なのです。これはその人工都市のセンターというか、市役所みたいなものです。アメリカの富豪が、小さな島に人工都市をつくっているのです。

これは、アメリカに行くとき々あるのですけれども、「ゲートッド・コミュニティ」といって、セキュリティのために壁に囲まれて、そして大体そこには非常に裕福な人が住んでいるのですけれども、プロスペラは、ゲートッド・コミュニティの一種です。島ごとのゲートッド・コミュニティのようなものです。こういうのを彼らは「自由都市」と呼ぶのですけれども、そういう私有地を国家の法から自由な空間としてつくる。例えばそこでは税金は納めなくてもよくてとか、すごくいい施設がいっぱいあってとか、そういうのはつくるのですけれども、それだけ聞くとちょっとしたリゾート地でお金持ちはいいねみたいに思うのですが、これが、そんなに笑えない話になっているということを言います。

例えばこれなんかもそうです。これはピーター・ティール。ピーター・ティールご存じですか。ピーター・ティールというのはペイパルを創業した、やっぱりIT系の投資家ですね。ピーター・ティールがつくった会社「Seasteading Institute」という、要するに非営利団体ですけれども、何をしているかという、海に都市をつくるわけです。さっきの「プロスペラ」とも同じタイプの都市です。ピーター・ティールはお金たくさんありますから、パナマの周辺と、それからフィリピンの周辺の海に、海だったら誰の土地で

もないから、自分で勝手に都市をつくらうということです。

あまり気づいてなかったかもしれませんが、トランプは選挙運動中に、アメリカの連邦内にこの種の自由都市を10個ぐらいはつくるのだとして、コンテストをやるとかということをしていましたが、果たされています。ともあれ、プロスペラや海上都市は、一体何なのかということから、先ほどのナオミ・クラインたちの論文は始まります。

結論的に言うと、これら（プロスペラや海上都市）は比喩的に言うと、脱出ポッドというのかな。脱出ポッドって分かりますか。ロケットなんかで何か緊急事態があったときに、そこから脱出するためのもの。戦闘機なんかでもあるではないですか。これは、この都市自体が脱出ポッドだというイメージなのです。

どうして脱出しなければいけないか。地球が破滅に向かっているからです。来るべき何らかの破局に至ったときに、選ばれた人たちがそこで安全にいられる場所をつくっている。一種の脱出ポッドなのだ。

トランプ周辺のテクノ・エリートたちは、お金と優れた技術者等々をたくさん持っているわけですけれども、破局を防ぐことができるとは、もはやほとんど思っていない。よく見ると、「破局を防ごうとしているどころか、破局をますます近づけているんじゃないの？」と言いたくなるようなところすらある。そしてその破局の後に、選ばれた人たちが行くための要塞的な都市をつくっている。これは実は、終末論を前提にしたプロジェクトなのです。

この種のものの中で最大のものは、これは皆さんよく知っている。イーロン・マスクが何で火星にこだわるのか。「火星旅行はロマンチック」だけではなくて、どうもこれは、いざとなつて地球が駄目になったときの避難場所なのです。超エリートならば、火星で。これはさっき言ったナオミ・クラインが言っているのですけれども、「現代版ノアの箱舟」であると。これは「ノアの箱舟」です。「ノアの箱舟」に今、いろいろな動物が入っていくシーンですけれども、イーロン・マスクは、言ってみれば、「ノアの箱舟」として火星を用意している。

考えてみると、昔、何年も前は、どっちかというといーロン・マスクは、環境問題とか、あるいはAIの危険性とかということにいろいろ気をつけなければいけないみたいなこと言っていて、どっちかというといーロン・マスクは、言ってみれば、「ノアの箱舟」として火星を用意している。

うことは、例えば環境規制をするためのスタッフも減らしていくということですからね。

要は、これが言ってみれば、「様々な破局が迫っている」「それを乗り越える」と言いながら、実際「お前が破局を近づけるのに一役買っているぞ」みたいな状況なのですけども、そういう感じです。

これが全体として見ると、こんなイメージなのですよ。皆さん知っていますか、この「ラブチャー」というのは、アメリカのクリスチャンが好きなイメージなのですけども、あるとき、信仰のあつい選ばれた者が、キリストによって、救い上げられて、黄金の国というか、神の国に迎え入れられるというイメージなのですよ。

言ってみれば、アメリカのお話とか、宗教がかった話とか映画とか、結構実はこのラブチャーのイメージがあります。言ってみれば、現代版世俗的なラブチャーとして、いざとなったらピーター・ティールの島に行きましょとか、「いや、俺はそんなところじゃ安心できない。火星まで行く気である」と。本当に考えてみるとばかげた感じもしなくはないが、しかしある意味で本気、そういう感じなのですよ。

つまりこれらは全部「破局迫れり。もはや避けることできず」ということを前提にした行動なのです。そういう意味でいうと、本当にベースのところに終末論が組み込まれているのです。

ただ、そんなことを言っても、それはその特別エキセントリックなやつじゃないの。だって、ピーター・ティールにしたって、イーロン・マスクだって、偉そうに真ん中のほうにいるけれども、でも、人間的には相当変わっている。それに、そもそも要塞都市に行けるって、相当金持ちでなければ駄目じゃない。トランプ支持者は貧乏な白人もいっぱいいるわけだから、ある意味では、大半のトランプ支持者にとっては関係ないですよ。それに、結構アメリカのクリスチャン間ではこのラブチャーというイメージがありますけれども、しかし、そこはもうちょっと普通に生きている人は、そこまで律儀にそんなこと考えてないよ、となると思うのですよね。

が、心配いらぬ。そういう普通の人のためのソフトな終末論というのがちゃんと用意されているのですよ。もうちょっと現実的な。

例えばどういうことを言いたいかという、例えば皆さん、これはどうですかね。アメリカのことに詳しい人は、イーロン・マスクなんかとともに有名人物ですけども、スティーブン・バノンという人、ご存じですか。

スティーブン・バノンというのは、僕がもっとも興味がある人の1人なのですけども、スティーブン・バノンというのは、昔、ケンブリッジ・アナリティカというデータ分析の会社をつくって、トランプが最初に当選したときにトランプの選挙参謀になったりして、非常に活躍したということになっていて、簡単に言うと、トランプのブレーンなのですよ。

第一次トランプ政権のときには、今のイーロン・マスクみたいな感じでかなり中枢にいたのですけれども、この人は思想的に純粋なところがあって、トランプとけんかしてしまって、追い出されてしまっているのですけれども、今でもトランプのこと支持しているのです。

このスティーブン・バノンは筋金入りのトランプ支持者で、しかもある意味、結構頭がいいのですけれども、スティーブン・バノンのポッドキャストを聞くと、主にどういふことを言っているか、ものすごく分かりやすく言うと、例えば僕らは、南海トラフ地震が近づいているとすれば、そのための準備をしろということをやろう。ちゃんと緊急用のものを用意していますか。言ってみれば、そういう感じのことをよく言うのですよ。すごく「備えておきなさい」と。それからあと、「できれば^{きん}金で蓄財しておいたほうがいいでしょう」とか。

これは、これだけ言えばそれは普通の話にも聞こえるじゃない。特に気候変動が激しくなってきた、災害もしょっちゅうあるわけだから、気をつけなければいけない。あるいは、金も持っていたほうがいいのかというのは、大恐慌が来たときに備えろということをやっているのですよね。このぐらいだったら普通の予想の範囲内なのですけども、でも、やっぱり密かな「終末に備えておきましょう」という呼びかけなのですよ。

でもこのぐらいだと、そんな宗教的だ、何とかと言わなくても、受け入れられる程度の終末です。考えてみれば、僕らだって「持続可能性が危ない」といつも言っているのだから。だからその程度の範囲ですけれども、でも、やっぱりある種のソフトな終末論なのですよ。

一番重要なのは、先ほど言ったように、望ましくは火星に逃げていたり、火星に行かなくても、どこかの海の真ん中の要塞都市にいて、周りが大変なことになっているけれども、自分たちは何とか生き延びましたみたいになればいいけれども、先ほど言ったように、そんなのはごく一部しかできないし、お金もかかるし、大変でしょう。一番確実なのは、アメリカ自体を要塞都市にするということなのです。考えようによっては、それをやっているとも言えな

くはないのです。トランプ自身が、トランプ政権が。

具体的には何か。例えば国境管理ですよ。敵が、怪しいやつが外から入ってこないようにする。既に入ってしまった望ましからざる者は、できるだけ排除すると。国境管理というのは、考えてみればアメリカ全体をゲーテッド・コミュニティにするようなものです。

あるいは、これはナオミ・クラインたちが言っているのですが、そうなのかな、なるほどと思ったのだけれども、トランプ大統領はいろいろ変なこと言うわけではないですか。「パナマ運河はアメリカの管轄にして、グリーンランドも買おうかな、ウクライナの鉱物が欲しいと。それから、カナダはアメリカに入ったらどうだ。これは、先ほどスティーブン・バノンとの関係で、僕ら、来るべき破滅のときに備えてちゃんと備蓄をしておきなさいよと言うのと同じで、来るべきときに備えて、アメリカは備蓄しているのだと。パナマ運河を使えるようにしておくとも便利だろう。グリーンランドだって温暖化すれば凍結しないから、重要な航路として使えるだろう。カナダは優れたミネラルウォーターがたくさんあるのだよ。みたいなことで、備蓄しているのだと。ウクライナの鉱物もあると助かるね。言ってみれば、全体の領土自体を破局のときに備えた要塞にしていく。貧乏な人でも大丈夫だよ。アメリカ全体が要塞都市だから、という感じです。

だから考えてみると、ものすごく意識的に終末論を唱えている人もいるし、そうでなくても、何か終末論的マインドというのが「トランプ現象」の中核にあるのですね。

しかも、ここで思うのですが、オウムの終末論のときに僕は先ほど言いましたけれども、終末の後に一部の人に救いが来るわけです。この場合もそういうことになっているわけです。しかし、その「救い」がどんなものか。どんなユートピアなのかというビジョンは、トランプ側のこの場合もほとんどないのですよ。ゲーテッド・コミュニティにいれば大変なことにならなくて済むということがあって、税金も少ないとか、何かいろいろあるわけですがけれども、何かそこに人を引きつけるような詩的なものは全くないのです。

破局が来て、それから脱出できるのだということだけが問題にされていて、脱出先がどうなっているかという話については、ほとんど想像力が働いていないのです。そういうタイプの終末論なのです。

もう1つ、僕ちょっと言っておきたいのが、これも重要だと思うのですが、トランプの周辺、特にそういうテクノ・エリート系の人たちは、最近、どうですかね、

皆さんそういうものにどのくらい興味があるか分かりませんが、現代思想の流れとしては、いわゆる「加速主義」に近いのです。

「加速主義」って分かりますか。これは現代思想に慣れている人にとっては難しい言葉でも何でもありませんが、「加速主義」ってどうですか、分かりますかね。知らないですか。

「加速主義」は何を加速するかというと、資本主義を加速するということなのですよ。資本主義はイノベーションをしていくわけではないですか。それで、資本主義のイノベーションをものすごく加速させて、ほとんどSF的なレベルまで加速させる。それが人類にとっての、人類の解放のための最後の最も重要な鍵だというのが、「加速主義」というものなのです。トランプ周辺の人たちは、ほとんど全員がこの「加速主義」、もしくは「加速主義」に非常に親和性が高い、つまりシンパシーを持っている人たちなのです。

「加速主義」の逆は、例えば皆さんにとってどのくらい読まれているか分かりませんが、斎藤幸平さんの「脱成長コミュニズム」でしょう。「脱成長」というところが逆なのです。つまり反加速主義なのです。それに対してその反対を行く人たちは「加速主義」です。資本主義を徹底的に加速させる。この加速主義者が多いのです。

ただ、「加速主義」とはどういうことかなということを考えると、こんな感じがします。これはもしかしたらパンフレットにもちょっと書いたかもしれませんが、これはシュンペーターという20世紀の前半の有名な経済学者が言った言葉ですけれども、資本主義の核は「創造的破壊」です。創造のために破壊していくという、「創造的破壊」が資本主義なのです。

この資本主義というのは考えてみると、創造することと破壊することが、ほとんど一致してくる。加速主義者は言ってみれば破壊に重点があるのです。言わば、世界は破壊なのです。

創造は何のために使われるかというと、その破壊の状況からの脱出のためのテクノロジーです。宇宙に行って火星に行くだとか、あるいはよく使われるのは、最近のAIもそうです。例えばAIを汎用性の高いAIにして、例えば自分の脳をそのAIに全部アップロードしておく。そうすると自分の精神自体は人工知能として残って、火星で生き延びるといような、例えばそんなことに使っているのですね。資本主義のイノベーションを。そんなことが実際にできるかどうか分かりませんが。

いずれにしても今言いたいことは、オウムの場合と同じで、トランプ周辺の終末論は、本当は、破壊のほうに重点がある終末論なのです。

例えば、このことをすごく思うのは、皆さん知っているグレッタさん、それからバンス副大統領を出しましたけれども、トランプ政権のブレンたちは、グレッタさんがすごく嫌いなのです。どうして、バンスを出したかというと、この間片山さんと対談したときに、片山さんと話しましたけれども、僕はバンス大統領の演説に度肝を抜かれたのです。

皆さん、ニュースで見た人いますか。バンスがヨーロッパに行って、ヨーロッパで演説をして、いろいろなことを言ったりしたことがあって、そのヨーロッパでやった演説の中で、彼は受け狙いで言ったつもりだけれども、あまりにも過激なジョークで、場が完全に凍ってしまったのです。どういう受け狙いを言ったかというと、イーロン・マスクがヨーロッパの、例えば「『ドイツのための選択肢』はいいぞ」とかと言って応援したりするわけではないですか。ヨーロッパのポピュリズムの右翼をイーロン・マスクが応援しているわけです。それが「お前なんか関係ないのにうるさい」という感じで、ヨーロッパの特にリベラルな人たちから見ると、不愉快なわけです。「移民に反対している右翼を、何でお前、イーロン・マスクが応援するんだよ」みたいな。

そのことの関係でバンスが言ったのです。「皆さん、イーロン・マスクに2、3週間文句言われたぐらいのことで、何を文句言っているのですか。アメリカはこの10年間、グレッタから文句を言われても我慢してきたんですよ」と言っているのですよ。「グレッタの批判を我慢するほうがよっぽど大変だったのに、お前たちは、何でイーロン・マスクが2、3週間文句言ったぐらいで」とか言ったのですね。そのグレッタさんは、ヨーロッパではヒーローですから、そのジョークにはさすがにみんな笑えなかった。とにかく、バンス大統領をはじめとするトランプ周辺のエリートたちは、グレッタさんを嫌いなのです。

ここで重要なのは、なぜそれかということです。つまりよく考えてみると、グレッタさんは特に環境問題、気候変動で、地球が破局に向かうことを心配しているわけではないのですか。そして、トランプのブレンたちも「破局が迫っている」と言っているのですよね。「破局から逃げなければいけない」。普通だったら、お互い終末の破局を恐れているわけだから、「お互い協力しましょう」、少なくとも「同じことについて心配しているよ」となりそうなのに、

トランプやその周辺のエリートにとって、グレッタさんが「一番悪いやつ」と。

例えばピーター・ティールという人は、もっと宗教的な比喩で言っています。グレッタさんは現代のアンチ・キリストだと。反キリストであると。反キリストというのは、先ほどちょっと言いましたけれども、「ハルマゲドン」のときにキリスト軍と反キリスト軍が戦って、雌雄を決することになっている悪魔のことです。グレッタさんは、その最悪の悪魔に例えられている。

何でそんなにいけないのか。これは、僕はこう思うのです。グレッタさんは、破滅や破局を避けようとしているわけですね。だけれども、ピーター・ティールたちは、本当は破滅を避けられないと思っているわけ。避けられないどころか、そこまで行ったらおしまいだけれども、来ると思っているし、来たほうがいいとさえ思っている。よく見れば、お前は破局が近づくように努力しているようにさえ見えるぞ、という状況なのです。

つまり、ピーター・ティールたちにとっては、本当は破局が来てもらわなければ困るのですよ。僕は彼らに「心配しなくてもいい。破局は来るのだ」と言ってあげなくてはいけない、と思っています。だけれども、グレッタさんはその破局を防ごうとしているから、「一番悪いやつ」になる。そういう感じですよ。

だからこうやって見ると、もちろん時代も30年も回り、しかも、世界で最も裕福な国の超エリートたちがやっています。もちろん日本のオウムもかなりの知的エリートがやっていたわけですが。30年も経っていますから、トランプ側は、オウムに比べて今風になっているのだけれども、しかし、何か本当は「破滅することが重要だ」みたいな、破壊に向かっていく終末論みたいなものに引かれているという点では両者は共通しているのです。こういうのを見ると、非常に両方が似ているなという感じがするわけ。世界が破滅に向かう。ただ、この中で1点だけが残る。つまり自分たちだけは破局を逃れるという、そういうタイプの破局ですね。

僕がオウム真理教のことを考えていたときに、彼らが、先ほど言ったように実は破滅的、破壊的な終末というものにどこか引かれてしまっている。どうしてそういうことになるのか。だって、普通は破滅なのだし、否定的なのだから、いいことがないということを言っているわけではないのですか。でもそれに、もちろんアリのバイ的にユートピアがその後来るという話になっているけれども、どうみてもユートピアのことを楽しみにしているようには見えないのです

ね。破滅そのものを楽しみにしているのですよ。どうしてそうなるのかなということについて、少しそのとき考えました。そのとき考えたのは、こういう心のメカニズムです。

これはちゃんと説明していると時間がかかってしまうのですけれども、少し大雑把に言うと、僕はその当時、今でもそう思っていますけれども、私の先生でもある真木悠介、見田宗介という社会学者の説を自分用にアレンジして、日本の戦後史を時代区分しています。「理想の時代」から、「虚構の時代」へ。さらに、その後「不可能性の時代」というのがあるというのが、僕の考えですが、この「不可能性の時代」は、今は、わきに置いておいてかまいません。大事なのは、「理想の時代」と「虚構の時代」の対比です。

つまり、「理想の時代」というのが戦後ですから1945年から始まったとして、1970年代の前半ぐらいまでは「理想の時代」。

「理想の時代」が終わって、次の時代が「虚構の時代」と一応呼んでいるのです。これらはどういう意味かということ、我々のリアリティというのがどう構成されているかを考えたときに、リアリティというのは、現実ならざるものとの関係で意味づけられるといいますか、物語化されている。現実ならざるもの、取りあえずそれを「反現実」と呼びますけれども、この「反現実」とは何か。「反現実」によって現実が意味づけられる。問題は、この「反現実」というのがいろいろあるのです。

現実の反対語を考えればいい。現実と理想、現実と作り話（虚構）、あと現実と夢とか、いろいろあるわけです。

つまり「反現実」には様々なモードがあって、現実を意味づけるときに中心的なモードになっている「反現実」が、ある時期までは「理想の時代」である。ある時期から、理想が色あせてくる。

「理想の時代」というのは、具体的に言うところのことです。我々の理想の社会、理想の人生が何であるかということについてのイメージが明確で、かつ、社会的なコンセンサスがあるということです。

例えば戦争が終わったときに、日本は戦争で負けて、これから平和で民主的な国にしなければいけないとかという、例えば民主主義の理想があったり、あるいは一部の人は、例えば左翼的な理想を抱く人もいるかもしれませんが、とにかく民主的な社会。あるいは、豊かな経済成長をする社会とかが、国民共通の理想だった。

人生についても、理想の人生というのは割にはっきりしているわけです。ある程度のところに就職して、適当なと

ころで結婚して、東京の郊外に一戸建てをつくってみたいな、そういう感じの幸せな生活みたいなもののイメージが明確です。

そういう自分たちの理想の人生や社会についてのイメージがはっきりと明確、かつ合意があって、何が理想であるかについての疑いがない。そういう時代です。

それが、1970年代の後半ぐらいから、そういう理想の持っている本物らしさとか魅力というのがだんだんなくなっていくのです。だから理想を相対化する「虚構の時代」になっていくのですけれども。「どんな理想も嘘っぽいな」という感じ。「どんな理想も嘘っぽいな」というときに、本物はどこにあるのか。何かの理想を言えば「そんなのって本当じゃないよ」「つまらない理想だね」「自分の人生を引きつけるほどの魅力はないね」。そのとき、「どんな理想も本物じゃないね」というときに、唯一本物っぽく見えるのは、どんな理想も、理想1を持ってきても、理想2を持ってきても、理想3を持ってきても、どれもみんな嘘っぽいな。全ての理想を断固として拒否して否定することだけが、本物っぽく見えるわけです。

ポジティブな理想を、例えば「戦後民主主義は大事だよ」みたいなことを言うと、「ふーん、いい子ぶっちゃって」みたいな感じ。「そんなのは全部嘘だ」と、全てを拒否する。それだけが本当っぽく見える。全てを破壊する終末が、何か一番魅力的に見える。「全部リセットボタン」みたいな感じですよ。少し分かるではないですか。全部リセットボタンで、すっきりする。

本当はこういう見方には、ある盲点というか、錯覚があるのですよ。全てが破壊されるのに「俺だけは破壊されない」とみんな思っているのですよね。だから本当はこの錯覚があるのですけれども、いずれにしても、そういう感じのメカニズムが90年代の日本にあって、全ての理想を断固として拒否していく破壊の神に、多くの若者が引かれていったのですね。

僕が思うのは、今アメリカで起きていることも、ちょっとそれに似ているのではないかということです。何かポジティブな理想、そういうものを言っていく、それ自体が全部相対化されて、嘘っぽくなったときに、ある種の否定だけが魅力的なものになっていく。

つまりこんな感じなのです。「オウム現象」と「トランプ現象」を見てみると、まるで何の因果関係もないのに、世界のある片隅で起きた小さな出来事が、グローバルな規模で回帰してきているみたいな、そんな感じに見えてきてしまうのですね。

今、終末論についてやったわけですが、「トランプ現象」で何が起きているかを理解するために、あえてオウムのほうから迫ってみる。オウムで起きていることをベースにして「オウムのときこんなことが起きたな。とすると、もしかして『トランプ現象』でも同じようなことが起きているのではないか」といった筋で考えてみる。

例えば、今の終末論についてもそういうイメージを出したわけです。彼らが90年代の中盤に、なぜああいう終末論に引かれていったのだろうかというメカニズムと同じようなことが、例えば今、アメリカでも起きているとすれば、と考えた。今度もその線で、オウムで起きていることを少しベースにしながら、トランプで起きていることを解釈する。

どうしてそんなことわざわざしなければいけないか。もちろん30年も違いますから、いろいろなことが違います。ベースになっている知識も技術も何もかも違いますけれども、ただ、ある意味でオウムのほうが純粹というか徹底しているところがあるのです。

徹底しているというのはどういうことかという、これは別にオウムの人が偉くて徹底しているわけではなくて、オウムはしょせんと言っただけだけれども、一種の幻想的な宗教なのです。人から見れば、ちょっと妄想に見えるような宗教です。

今言ったようにトランプたちだって、考えようによってはちょっと妄想くさいところがあるのですよ。そんなに火星にこだわってどうするのみに思うわけです。しかしそうはいっても、一応現実の政治なのです。なので、現実に合わせていかなければいけない。

オウムのほうは幻想ですから、どういうふうにも考えることもできるのですよ。だから、オウムで起きていることは現実に妥協しない、純粹形態みたいなものが見えてくる。それを、トランプを考えるための今度はヒントにしてみようというのが、次の最後の流れですけれども。

例えば、僕はトランプがこのわずかな時間の中で言ったことで一番びっくりしたことの1つは、これも皆さんもびっくりしたとは思いますが、「ガザを更地にしたりリゾート地にしたらどうか」。これは発想としてびっくりするわけです。

というのは、これはイスラエルにとっていいことでも何でもないのですよ。もちろんパレスチナの人にとってはもっとひどいですが、でも、イスラエルにとっても、「それはありがたいね」という話でも何でもないので、

イスラエルとパレスチナのハマスの葛藤とは、ある意味、全然関係ない発想なのです。

現にそういうことが実現するかどうかは別として、そういうことを考えるときのトランプの社会についてのイメージですよ。世界や社会をどのように見ると、こんな発想が出てくるのか。これを考えるのに、今度は変な回り道ですが、オウムに回ってみる。

例えばオウムは、さっきちょっと言いましたけれども、これが当時の山梨県にあった上九一色村というところのオウムのコミュニティです。1995年。これも一部だけしか撮ってなくて、こういう建物がいっぱいあったわけです。この当時のことを覚えてらっしゃる人は、みんなよく覚えている。この建物のことを彼らは宗教用語で「サティアン」と呼んだのですけれども、すごく特徴的なのです。特徴というか、特徴がないところが特徴なのですけれども、要するに、ただの直方体なのです。これを自分でつくっているのですよね。倉庫みたいな感じ。ほとんど窓がないのです。

普通、宗教的な教団は、自分の建築物に結構意匠を凝らすわけです。何か聖なる雰囲気とかというのを。だけど、オウムのサティアンはあまりにも何もない、ただの箱だけの建築。

とにかく今言いたいのは、まずオウムは、ちょうどトランプは「更地にガザをゼロからつくり直す」と言った。オウム真理教は、ここ（上九一色村）はすごく土地が安いわけですよね。その土地を買って、そこにゼロから自分たちのコミュニティをつくったのです。

オウムのすごい特徴は、出家するというのが、例えば皆さん仏教で、例えば出家している人は坊さんだけだからほんのわずかだけれども、オウム信者は基本、出家することが望まれるという感じで、出家率がものすごく高いのです。出家者だけのコミュニティをつくったわけです。

彼らはこのコミュニティを、しかも自己完結的なコミュニティというか、つまり、そこに自分がたまたま引越して、家をつくったというのではないのですよ。そこに彼らは当時、幻想の国家をつくったのです。はたから見れば、ちょっとごっこ遊びに見えるのだけれども、本人たちは大真面目。だから、ちゃんと中に、何とか省、何とか省とかって名前がついている組織があるのですよ。防衛省だ、内務省だ、何とか省だとかいって、国家になっている。つまり更地に1つの国家を、上九一色村に自分たちの自律的なコミュニオンをつくったわけです。

ついでに言っておくと、彼らは異様にスパイを恐れてい

た。トランプのアメリカが移民を恐れるように、というほどよりも、はるかに恐れる。

僕がもちろん入ったわけではないので、その当時いろいろな信者から聞き取りとかいろいろやったのだけれども、出家してそこに行くと、もちろん来ることを望まれるのですけれども、「お前はスパイじゃないか」ということについての、すごいチェックがある。誰がスパイするのかなど思うのだけれども、オウム viewpoint からすると、いろいろスパイしそうなやつがいっぱいいるのです。日本の公安警察かもしれないし、ライバル宗教かもしれないとか、とにかく。うそ発見器とかいろいろなことにかけて、大丈夫となったらやっとなら入れてもらうのだけれども、入ってからも「あいつがスパイではないか」という疑心暗鬼なのだよね。

僕がオウム信者の中で一番本当は興味があったのだけれども、話ができなかった人がいる。その人は、事件の渦中で殺されてしまったのです。トップクラスの幹部で大阪大学の卒業生で理学部の大学院を出た村井という幹部がいたのです。その人は教団の中で麻原の次に偉かったのですけれども、途中で右翼の青年に殺されてしまうのです。その村井の運転手をやっていたという信者と、僕はたくさん、話をしました。その運転手は下っ端だからそんなに偉くはないのだけれども、でも、超幹部の運転手だから、幹部とよく話をする。

村井さんがいつも言っていたことがある。そのTくん。「Tくんね、今、上九一色村に本当はスパイがたくさんいるから気をつけろ」「そうですか。どのぐらいいるんですか」「少なくとも4割の信者はスパイである」というわけです。4割ってすごいですよ。どうして4割なのかと思うと、5割になったらそれは信者の集団なのか、スパイの集団なのか分からなくなってしまうから、かろうじて信者の集団でいられるギリギリの数字。だから、ほとんどのやつが怪しいといっているのですよ。そのぐらい疑心暗鬼なのです。とにかくそういうコミュニティをつくった。

このコミュニティでオウム信者はどんな生活をしてたのか。その中の生活のあるシーンとして一番重要なのは、これなのです。

これは当時オウム信者のイメージの原型になったのです。この白い服は「クルタ」といいます。ここで注目したいのは、彼らの頭につけているヘッドギアです。信者の多く、特に出家信者の多くがヘッドギアをつけているのです。これがオウムの象徴のように言われたのです。

こっちは麻原彰晃が逮捕されたときです。逮捕されたと

きも、麻原彰晃の頭にヘッドギアがついているのです。

このヘッドギアには、彼らにとっては重要な宗教的意味が与えられていて、具体的にはどういうことになっているかという、これを発明したのは先ほどの村井さんだったりするのですけれども、教祖の脳波がビビビッと自分の脳に伝わってきて共振するという装置なのです。

この装置が彼らにとってリアリティがあるわけですが、その仕組みとか、その背景にある論理を少し説明したい。これから本日のお話の中で、今のところはそんなに難しくなかったと思うのですけれども、これから言うことだけがちょっとだけ難しい。これは最後に落ちてくるわけですが、それまでのプロセスをお話しします。

オウムは出家して、普通に生活しながらという、修行するために生活しているわけです。修行の中でどんな修行が一番重要かという、僕は当時、チベット仏教の専門家ともいろいろ話して、すごく信頼できる専門家がいつも言っていたのだけれども、オウムの修行のほとんど全部はチベット仏教の何とか系にもあって、彼らのオリジナリティはほとんどないのだけれども、1つだけ、チベット仏教には全くない修行があるというのです。しかも、それはオウムにとっては一番重要な修行の1つなのです。1つだけ。それは「独房修行」というやつなのです。つまり、コンテナのような窓のない箱に入れられて、そこで瞑想するわけです。

先ほど「サティアン」という建物を見せたのではないですか。窓のない箱というのは、実は彼らにとって非常に重要なのです。たまたまではなくて、彼らの精神の形という。その究極バージョンが「独房修行」なのです。独房に入って長時間修行をする。これが彼らにとって一番重要。

そうすると一種の、客観的に見ればいわゆる拘禁反応という、密室にいるとだんだんと妄想を見るようになるのですが、それにちゃんと宗教的な意味合いが与えられているのです。だんだんと光のようなものが見えてくるそうです。それが解脱の兆候だったりするわけですが、

ちょっと勉強ください話をします。「独房」と言うと、勉強している人はこれを思い出します。これは分かりますか。大学のどこかの思想史とかそんなのに出てくる。「パノプティコン」と言っても分からないかもしれない人は分からないのですけれども、これは19世紀の初めぐらいにベンサムという人が発明した監獄の設計図なのです。これは上から見たもので、これは横から。この1つずつが監獄なのです。その監獄に1人ずつ独房に入れて監視する。

なぜこれが重要かという、これをものすごく重視し

た、超有名大型哲学者というのがいるのですよ。これは、文科系だったら大学卒業までに名前を絶対知らなければまずいですよ。ミシェル・フーコーというフランスの哲学者、思想史家です。ミシェル・フーコーという人が、このベンサム「パノプティコン」というものをものすごく重視した。どうして重視したかという、監獄が重要だから重視したのではなくて、これは、近代社会の権力の働き方というものを例解しているモデルになっているのだというわけです。

つまりどういうことかという、独房には、1人ずつ囚人がいるわけですよ。そして中央の監視塔に人がいるわけです。中央塔から全ての部屋が見えるのですよね。常時監視されているわけ。1人の状態に置かれて。そうしている間に、囚人はだんだんと自分のことを内省するようになるわけですよ。自己反省するようになる。そうやって人間は従順な主体になっていくのだよ、とフーコーは、ベンサムやそのほかの当時の思想家たちの言っていることを引きながら、論じたわけです。これが近代的な権力の原型だと。

そんなこと言ったって、皆さん、監獄に入ったことある人はそんなにいないでしょう。近代的な権力では、でも、実はそうではない。一番典型は学校なのです。学校はさすがに監獄にはなっていないけれども、一番典型的なのはテスト。テストするときのことを思い出してください。隣のひとと協力しては絶対いけない。独房でやっているのと同じ。みんな先生が監視して見ているわけですよ。独房で1人になって反省する。これが近代的な権力のポイントだというのが、ミシェル・フーコーという人の言ったことなのです。

それと、先ほどのオウムの「独房修行」というのをちょっと比べたくなるわけ。そうすると、ある決定的な違いがある。決定的というか簡単な違いがあるわけですよ。

これは模式化して表しているわけですが、このポイントは、こっちからはこっち（独房から中央塔）が見えないということなのです。こっち（中央塔）からは見える。こっち（独房）が明るいものだから、本当はこっち（独房）にも窓があるのですよ。見れば分かるでしょう。だから光が通る。でも、ここ（中央塔）は真っ暗なのです。だから、本当は誰も見ていなくても分からないのです。いるかもしれないと思うだけで、見られている可能性がある、みんな監視されていると思うと、テストのカンニングもできないというのと同じです。そういうことになっている。だからとにかく、パノプティコンの場合は、基本は閉じられているけれども、窓が小さく開いているということがポイントです。

それに対してオウムの「独房修行」は、本当に窓がないのですよ。全く窓がない。そういう状態でやっていると、先ほど言ったような拘禁反応みたいなことが起きるわけですが、それに独特の宗教的な意味づけがなされています。

どういう意味づけがなされていくかという、彼らによると、だんだんと一種の幽体離脱というのかな。自分の体から自分の心が離れていくみたいな感覚になっていく。だから、ここにいながら自分の心は別のところにいるみたいな感じになっていくのです。

別のところとはどこなのか。別のところは、典型的には教祖麻原のところにいるのですよ。この中に閉じこもっていると、いつの間にか自分の体から魂が遊離して行って、その魂はしかるべきところにいる。麻原のところにいる。という状態になれば、一番望ましいわけです。

ということは何を言いたいかという、先ほどのヘッドギアのことを思い出してください。あれは、今言った状態を電波の力を使ってつくろうとしているわけです。脳波が麻原と共振する。そうしたら、麻原のところから自分の体が行っているのと同じという状態をつくろうとしているわけです。1人になると、いつの間にかつながっていく。そういう感じですよ。

だから僕は、こんな感じがするのですよ。オウムの独房はこれと違って、初めは全く穴が開いてないわけです。穴が開いてないけれども、ずっと1人でいると、いつの間にか自分の体が外に抜けていくわけではないですか。穴が開いていないのにいつの間にかどこかに抜けていく。

僕が思い出すのは「ロビンソン・クルーソー」。ロビンソン・クルーソーは皆さん知っていると思いますけれども、ロビンソン・クルーソーを子ども向けのお話以外で読んだことある人はあまりいないのではないかと思いますよ。ちゃんと読んだことある人はいますか。

ロビンソン・クルーソーは、すごい臆病なのね、この人。だから人食い人種が怪しいとか、いろいろ思って穴を掘って、それこそ自分で独房をつくるのです。フライデーという友達というのかな、家来みたいなのができると、フライデーのことすら信じていない。「あいつは夜になったら俺を食う気じゃないか」みたいに思っている、自分だけ。一生懸命どんどんどんどん奥まで掘っていくのです。そうすると、ある日気がついたら、穴がずっと行ったら、反対側に抜けてしまう。あまりにも1人、独房に入っていたら、反対側に抜けてしまいました。

でも、オウムの「独房修行」はそういう感じなのです。

完全に閉じられていると、いつの間にかに自分の体が穴から抜けていって、そして麻原彰晃、教祖と直接的に結びついてしまうという。体と体が、あるいは魂と魂が、直接共鳴するように、同期するようにつながってしまうという、そういう装置なのですね。

これは、本当は、先ほど言ったヘッドギアは、ちゃんと宗教的な意味合いもきちんとつけてあって、それは説明しておく、あまり気にしなくてもいいのですけれども、本当は仏教というのかな、チベット仏教に「シャクティパット」という技法があるのですよ。「シャクティパット」なんて言ったって分からないと思いますけれども、これは知らなくてもいいのですけれども、多分テストには出ない。

「シャクティパット」というのは、外から見れば、一種のマッサージです。彼らの理論によると、人間の額の目と目の中間に、見えなくても本当の目があって、教祖がここをマッサージしてくれるのですよ。そうすると、すぐくえも言われぬ快感が得られて、自分が浄化されると。イメージからすると、教祖の体は純粋なのですね。それに対して、信者一人一人はまだ不純な体なのです。教祖の体の純粋なバイブレーションを信者に伝えるのです。そうすると信者も浄化されるという論理なのですけれども、実際、麻原彰晃という人はこれが非常に上手だったらしいのです。信仰なんか持っていないけれども、麻原にシャクティパットをやってもらうとすごくいい気持ちになるらしいです。だから、彼はマッサージ師として一流なのです。

ただ、これは教祖にとってはすごく疲れるらしいのですよ。だから、信者が、何千人、何万人とかいたら、毎日そんなことをやっていたらいいではないですか。そこで、どうやったらそんなことをやらないで、教祖の体の美しいバイブレーションを伝えられるかというので、いろいろな技術が開発されて、その中の極めつけなのが、さっきのヘッドギアなのです。マッサージをしなくても、脳波が伝わっていくという構造なのです。

今言いたい重要なことはどういうことかということ、一旦孤立するわけです。つまり、他人との関係を一旦、全部切断するのです。そうすると、ただ1人でいるわけではなくて、そうするとそのうちに、逆に特別な他者、この場合は教祖ですけれども、と直結しているような感じを得るわけです。

だから、自分がふだん持っている、今まで持ってきた全ての関係は偽物である。それをまず一旦切りなさい。全部切ると、唯一の純粋な本当の関係がそこから浮上してくる。そういうイメージなのです。その関係が教祖との、直

接、体が共振するようなイメージです。

ここで実は、重要なモチーフがあるのです。「家族的関係の否定」ということが、実はこのモチーフになっているのです。分かりますか。どうしてかということ、僕ら、いろいろな関係を持っているのではないですか。大学に入って新しいサークルもできて、友達もできて、いろいろな関係ができる。でも、全ての人にとって一番根本になる、本来的な関係とは何だろうかと普通に考えると、普通は家族の関係ではないですか。親がいなければ、自分は今ここにいることさえないわけだから、自分の存在と同じぐらい重要な、もともとの自分にとって本来的な関係は、親との関係ではないですか。だから、普通は親との関係が一番ベーシックな基本の関係なのです。

だけど、今のオウム真理教のやり方は「家族の関係も含めて、一旦全ての関係をゼロにしなさい。そうすると、家族の関係よりももっと本来的な関係にあなたは至るのですよ」というイメージが与えられるのです。

家族の否定というのは、オウムが一番極端ですけれども、日本の1970年代後半ぐらい、80年代ぐらいからの新しい宗教のモチーフになっています。宗教社会学者は「新新宗教」と呼びます。「新宗教」というのは普通、宗教社会学では、大体、幕末・明治維新以降に出てきた宗教のことを「新宗教」と言います。だから、昔からある浄土真宗とかそういうのは「新宗教」ではないのです。それに対して、近代になったときにできたのを「新宗教」と言うのだけれども、その「新宗教」の中でも特にちょっと性質が違うのを「新新宗教」と言って、これは20世紀の最後の四半世紀ぐらいから出てきて、その中の典型というか、究極の実例としてオウムがあるのです。その「新新宗教」はオウムが一番極端ですけれども、全般的に家族に対して敵対的なのです。逆に、それ以前の宗教は家族的なのです。

その一番は、大体昔の宗教は、新新宗教以前の宗教は、教祖のことを「おやじ」だとか「父上様」とか、家族の比喩で呼ぶのですよ。それに対して新々宗教、例えばオウムの場合は、麻原のことを「グル」とか「尊師」と言うわけです。家族、父ではないのですよ。家族的な関係を切って、家族よりもっと本質的な関係があるのだぞ、というイメージ。

例えば1つだけ言っておくと、これは一見、本日の話からすると派生的ですけれども、オウムがやった犯罪の中で、恐らく一番憎まれていた犯罪がこれではないかと思うのです。

これは、坂本堤弁護士一家を、1989年だから、本当は

「地下鉄サリン事件」よりは大分前なのですから、この坂本弁護士はオウムと裁判上対立していたのです。オウムは、その人たちが殺したのです。そして、初めオウムは「自分たちの犯行ではない」ということをかなり言い張ったのだけれども、最初から疑われてはいたのです。なぜかという、そういう裁判の事情もあったし、部屋にオウムのバッジが落ちていたのです。それは敵対したグループが、オウムの犯行に見せかけるための何とかだと、かなり言っていたのですけれども、だんだんと、1995年になってから、これは実はオウムがやったことははっきりしたわけです。これはオウムのやった犯罪の中では最も憎まれている感じがする。なぜか。

なぜかという、坂本弁護士は若い弁護士で奥さんがいて、幼い子どもが1人いて、その3人を全員殺したのです。典型的な美しい核家族というイメージがある。

しかもこれ、今、僕、2つ画像を出しました。坂本弁護士一家の碑。1つは富山県にあって、もう1つは長野県にある。これをちょっと言いたかったのです。

1995年になって初めてオウムの犯行だということが分かったので、死体をどうしたのだということで。そうしたら、3人しかいない死体を、全く別々の場所に埋葬しているのですよね。それが人々の気持ちをもつごく逆なわけです。死んでからも家族をばらばらにしたのだと。つまり、オウムには家族的関係に対するものすごい敵意がある。家族以上に本質的な関係があるというイメージがあり、彼らはそこに至ろうとしていたからです。

家族の否定というのは系譜の否定です。もっと言えば、歴史の否定なのです。その歴史的な関係の中で蓄積されてくる関係というのは、全部偽物である。もっと本質的な関係があるのだと。

でも、本質的な関係は歴史の中にはないとすると、どこにあるのか。それは、幻想の歴史に位置づけられるのです。それが「前世」です。オウムの信者はみんな少し偉くなると、ホーリーネームという宗教名を麻原からもらうのです。そのホーリーネームは仏教説話とかそういうのに出てくる人や仏弟子、菩薩なんかからとられるのです。「お前は昔、マンジュシュリー・ミトラ（文殊菩薩）だった」とか何とか言われるのですよ。現実の何の系譜関係はないのですけれども、そういうふうには。

つまり、現実の家族を含む全ての歴史的関係を無化してしまった上で、ある意味で、幻想的なバーチャルな真の関係というのを構成するというイメージなのです。

こういうふうにお話しすると、すごく妄想たくましい人

たちだと思ってしまうかもしれませんが、ちょっと考えてみると、これは、もちろんここまで極端なことにはなっていないけれども、実はその後の現在までに至る我々の人間の関係のつくり方を、ある程度、極端な形で先取りしている。

どういうことかという、1995年はWindows95が売られた年です。その年の11月にWindows95が出たのです。ということはどういうことかという、普通の人インターネットを使うようになった年なのです。それ以前もインターネットはもちろん使われていましたけれども、何か特別にそれに関係あることをやっている人のものだった。今のように誰もがメールアドレスを持って、「君のアカウント教えて」と言ったら、あるという状態になるのは1995年にWindows95が出て、それ以降です。今ではもちろんSNSもある。なぜそんな話をしているか。

例えば、皆さんが自分の個室にいて、SNSをやっている。そうすると、そこでみんなとのつながりを感じるというのは、先ほどの「独房修行」と形式だけは同じなのです。完全に1人になっている。家族からも1人になっている。けれども、つながる穴が開いている。スマホが、あるいはコンピュータの端末が。という、オウムの独房修行は、こうした現在の幻想的な先取りみたいところがある。だって、考えてみればヘッドギアはWi-Fiでつながっているみたいな感じなのだから。

あるいはこの種のイメージは、ポピュラーカルチャーに、結構僕は蔓延していると思う。皆さんがよく知っているのを、2つだけ例を出しておきます。

1つは左側「新世紀エヴァンゲリオン」。エヴァンゲリオンが最初にでたのはちょうど1995年で、やっぱりオウム事件の年なのです。僕はこの「新世紀エヴァンゲリオン」というのは、ある意味で結構、オウムの世界観と親和性が高いと思っているのですけれども、今言いたいのは、例えば皆さん、これは知っている方多いと思いますけれども、主人公のシンジがエヴァンゲリオン初号機に乗るわけではないですか。そのときに問題になるのはシンクロ率。自分とエヴァがどれだけシンクロするかで、エヴァが動けるか動かないか決まるわけではないですか。オウム信者は、自分と教祖の間の「シンクロ率」を上げようとしていたのですよ。同じイメージなのですね。

それからもう1つ。こっちはもっと有名、最近のもので「君の名は。」。実は新海さんのものというのは割にそういうものが多いのだけれども、この一番有名なシーン、「君の名は。」にしましたけど。

これは主人公の三葉と瀧の体が入り替わってしまうので

すよね。自分の心が、魂が、あっちに行ってしまう。あっちの魂がこっちに入ってきてしまう。というのが、先ほどのオウムの「独房修行」をやっているうちに、自分の魂があっちに行ってしまう、あっちの魂が私の中に入ってくる。しかもこの三葉と瀧は、知り合いでも兄弟姉妹でも親戚でも、何でもないのだよね。でも多分、前前前世で関係しているのです。という感じで、つまり普通のリアルな歴史の中には根拠のない、バーチャルな真実がそこにはあるという感じですね。

さて、そこから、最後に行きますね。それでここからもう1回、トランプに戻りたいのですよ。トランプの先ほどのガザの話に行きます。

僕はここにこんなイメージを感じるわけ。0つまり今多くは、オウムの話を通じて出した話はどういうことかという、歴史や伝統や系譜を一旦完全に無にしてしまう。そして、ゼロから本当の関係を作り直すというイメージですよ。ガザを更地にして、そこを何かにしてしまうというイメージは、ちょっとそれに似ていると思うわけです。全ての関係や伝統をゼロにして、そこからつくっていく自由都市。

先ほど一番初めに言った、最初のほうで僕、話しましたね。中盤ぐらいで要塞都市の話ですね。こういうのは実は、今言った無のところにつくる都市です。火星の都市は、今できていないのですけれども、もっと現実的なものとしては、イーロン・マスクはこのテキサス州に自分の市をつくらうとしているのですよ。先ほど言った自由都市と同じです。幾つかつくらうとしている。

あるいは、先ほどのピーター・ティールの海上都市。あるいは、知らないかもしれませんが、ケン・ホーリーという人がいて、この人はグリーンランドの大使になる予定だと思えるのですけれども、グリーンランドだったら幾らでも更地があるではないですか。つまり一旦関係を無にして、歴史をゼロにして、そこから関係と社会を構築するという構想をもっている。

これだけだと、オウムの話はぶっ飛んでいるのに、これは実際の都市の話ですから乖離が大きいと思うでしょうから、両者をつなぐ補助線を入れてみるといい。補助線というのは、これは割にアメリカで売れたのですけれども、スリニヴァサンというインド系の、思想家であり投資家であるみたいな人なのですからけれども、この人が書いた『ネットワーク・ステート』という本がある。結構売れて、読んだ人いますかね。彼もトランプ支持者のひとりです。

この「ネットワーク・ステート」というのはどういうことか、詳しくは説明している余裕はないのですが、名前だ

け聞くと、ネットワークだからインターネットのコミュニティをつくるという話ではないのかと思うかもしれないけれども、そうではないのですよ。インターネットも関係あるのだけれども、「しょせんはネットワーク」ではしょうがないのですが、実はスリニヴァサンの議論は、それより先に行っている。最初はまず気の合う同士でネットワークをつくって、そしてちゃんとクラウドファンディングをして、土地を買って、そしてその土地を自分たちの国にして、場合によっては政府をつくって、主権を持ったものにしてという、構想です。つまりインターネットが端緒ではあるのですが、そこから、現実の国をつくってしまうというアイデアなのです。これを間に入れれば、トランプ周辺の自由都市の話と先ほどのオウムの話とつながって見えてくるのではないですか。

つまり「脳波がつながっている」と言うともあまりにも幻想的だと思うでしょうが、それは先ほど言った皆さんの「僕らはSNSでつながっているのだよ」というのと、大同小異なのです。すごく気の合う同士でSNSでつながっているね。それをベースにして、本当のリアルな国をつくってしまおう、というのがスリニヴァサンの「ネットワーク・ステート」。もちろん実際にはつくれませんよ。でも、それを本気で言って、結構賛同者もいる。とはいえ、さすがにそこまではできないから、しょうがないから、さっき言ったように、たとえばテキサス州につくったほうがいいみたいな話になるのです。しかし、本当は「ネットワーク・ステート」を造りたいわけ。

とにかく、ここにあるのは「歴史なき共同体」「伝統なき共同体」に対する夢想めいたようなものです。これが皆さんにとってどうでしょう。私はあまり魅力は感じないけれども、でも、トランプ周辺の人たちは、そういうものに引かれていくわけです。

ただ、最後に一言だけ言っておきます。本日の講演の主題が「宗教」ですから宗教っぽい結論を言うておきます。仲のいい同士で、気の合う同士で、絶対摩擦のない同士で、自分たちだけで国をつくって云々という。ここに絶対にないものは、「隣人」ですね。「隣人」というのはどういうことか。この場合はイエスが言ったような意味での「隣人」です。

「隣人」と言うと、もちろん、言葉の「neighbor」というのであって、近くの人、隣の人という意味ですけれども、イエスが「隣人」というときには、近くの人、近所の人という意味ではないのですよ。イエスが「隣人」というのがどういう意味かということ、普通には嫌なやつと思われている人、嫌われ者のことなのです。何でその嫌われ者の

ことを「隣人」と呼んでいるのかなと僕は思うのだけれども、それは、次のようなことなのです。

近くにいる、「そいつのことを知れば知るほどよく分からないね」ということがあるではないですか。いかに近くにいる、近くにいればいるほど、「あいつはやっぱり俺と違うのだ」という、いわば他者性を絶対に無にできない、そういう相手のことを「隣人」というわけです。

そう考えると、トランプたちがつくろうとしている「歴史なき共同体」というのは、「隣人なき共同体」ということになるのです。彼らが求めているのは、全く透明な社会、不透明な他者がいない社会です。オウムというものをフィルターにして、トランプ現象というものを捉えると、こういうことが見えてくるわけです。以上が、本日のお話です。このぐらいにしておきます。(拍手)

片山 (司会) 大変刺激に富んだお話を頂きましてありがとうございます。ではご質問のある方は挙手をお願いいたします。

一番に手をお挙げいただいたのでお願いいたします。

発言者 A お話ありがとうございます。私、政治学をやっているの、政治学的に言うと、正直言って本日のご説明はあまり賛同できません。

ただ、建設的な議論をしようとする、おっしゃっていることはトランプの政権ではなくて、米国の政治、伝統、社会、それがやはり清教徒的な伝統で、二者択一的に自己肯定と相手を否定する、そういう点で、暴力性だとか、それから排外的だと考えれば、そのとおりだと思います。

トランプ政権だけではなくて、例えば民主党だって、世界中で戦争をしかけて、どっちかという死の商人みたいなことやっているわけですし、アメリカの中では国境を開放して、不法移民を入れて、伝統社会を破壊しているわけですね。

ですから、よくも悪くもアメリカというのは、そうやってどんどんどん新しいことをやっては、それをまた潰して否定して修正すると。そういうことで、日本の社会とは全く違う。そういうものだという意味で解釈すれば、そうだなと思いました。ちょっとお話が、指示的にキャラクターゼーションが過ぎているのではないかと思いました。

以上です。

大澤 今日の話には、ある種の理念的誇張というのがあります。ただ、僕は、ある種の誇張をしないと見えないも

のがあるような気がするのです。

トランプ政権というのを見てきたときに、例えば一方では、すごく驚くわけではないですか。ちょっと前までだったら、絶対にこの人は大統領にふさわしくない人の一番みたくない感じがの人が、大統領になってしまっている。その驚きというのを大事にしなくてはいけない。ただ同時に、それが歴史のまぐれのように、奇跡のように起きるわけではなくて、おっしゃるように、アメリカというものがどんなものであったかという流れの中でも考えなければいけない。

明らかにアメリカの伝統の中で起きていることなのに、しかし、僕は驚いてしまうということがありますよね。その驚きは、今までの予想の中に入っていなかったということです。その盲点になった部分をどうやって分析し、解釈するか。アメリカ人自身でさえも、ある意味で驚いているわけだから。

今日の話はオウムの分析としても、もちろん少し、あえてある部分を誇張しているわけですが、この場合もいろいろな部分を平均的に見るよりも、ある部分、僕らが一番ビビットに反応している部分を純粋化して、誇張していくという作戦なのですよ。そうしなくては見えないものがあると僕は思うのですけど。

片山 (司会) もうひとつどうぞ。

発言者 B 講演ありがとうございます。僕としては結構腑に落ちた話なのですが、1点質問させていただきます。

最後のほうにおっしゃっていた「伝統なき共同体」への理想が、例えばトランプだったり、麻原だったり、今回の話に通底しているということだったので、それが、途中で言っていた、破壊自体を求めている、ユートピアというのは求めていないみたいな話と一見矛盾しているような気がして、そこをちょっとお聞きしたいです。

大澤 言わば更地にするみたいなことなのですよ。ガザを更地にしてつくるでしょう。だから、破壊というのはその部分なのですよ。全部、一旦関係を無にするというのと、破壊のユートピアというのが重なっているのですよね。分かりますか。

発言者 B それは分かるのですが、例えば途中、基本的に左翼のグレッタさんの話とか、「理想の時代」みたいな話も出ましたけれども、そういったリアル的な大き

な物語というのにすがり続けるということは、今のトランプだったり、新興宗教だったり、それは何でも、リベラルだってそうなのかなというところがあって、そこは区別していらっしゃるのですか。

大澤 もちろんそうですね。

発言者 B それはどういう区別ということですか。破壊を待ち望んでいるか、というその点ですか。

大澤 普通はもちろんポジティブなものが混ざるわけではないですか。リベラルにしても、コミュニズムにしても。そのポジティブなもののために改良するみたいなこと、あるいは改善する。トランプの場合は、ポジティブなものはゼロなのですよ。

先ほど言ったように、さっきなぜ加速主義の話をしたかという、もちろん普通だったら、破壊は創造のためにある。でも、破壊と創造がほとんど重なってしまうところまで来る、という話をしているわけ。

例えば今のリベラルの話とか、そういうのももちろん、それだってみんな破壊があって、創造があるわけだから、その延長にあるのだと言いたければ言えなくはないですけども、創造的破壊があまりにも極端になると、創造ではなくて、破壊になってしまうのと同じような逆説があるのかな。そういう感じですね。

発言者 B ただ、最終的に先生のお話は、「伝統なき共同体」への理想というところに帰結したのが、僕は少し違和感があって。分かるような気もするのですけれども、結局そうすると、ポジティブなところを軽視しているということから離れていないのかなと。そうではないですか。

大澤 先ほども言ったように、破壊そのものを求めるというのは、ある意味で自分だけが安全なところにいるわけだよ、本当は。だから本当は、それ自体にちょっと矛盾があるわけではないですか。自分自身もハルマゲドンの渦中なのに、なぜか自分だけは絶対に安全に「核戦争をしても自分だけは死なない」みたいなイメージですよ。その「自分だけは死なない」の部分に、今度はポジティブな表現を与えると、今みたいな「歴史なき共同体」みたいなものになるのではないかというのが、僕の本日の話の筋なのですよ。

発言者 B では、「歴史なき共同体」というのはポジティ

ブではない、ということですか。

大澤 ポジティブと言えばポジティブですけども、ある意味で、現実ではないところに現実をつくるみたいな話です。普通は必ずこの歴史の中に接続されるわけではないですか。だから、ある意味で不可能なことをやっているわけですよ。

発言者 B 分かりました。それが切斷されているということが。

大澤 そうですね。

発言者 B 何となく分かりました。ありがとうございます。

大澤 そういうことです。

片山 (司会) ありがとうございます。

皆様、ご質問やご意見、特にご意見がおありの方もたくさんいらっしゃると思うのですけれども、大分予定の時間を過ぎてしまっているの、誠に恐縮ですが、ここで取りあえずは閉じさせていただければと思います。本日はありがとうございました。(拍手)

——了——

オウム事件を通じて 現代社会を見る

「抑圧されたもの」の回帰のように

慶應大学 教養研究センター基盤研究講演会

2025年6月4日

大澤真幸

図 1

1995年
3月20日
地下鉄
サリン事件



図 2



図 3

ロンドンでも、パリでも・・・

ロンドン同時爆発事件 2005



シャルリ・エブド襲撃事件 2015



図 4

風刺不可能な二人の「指導者」

トランプ



麻原彰晃



図 5

2021年1月6日 議会
議事堂襲撃事件

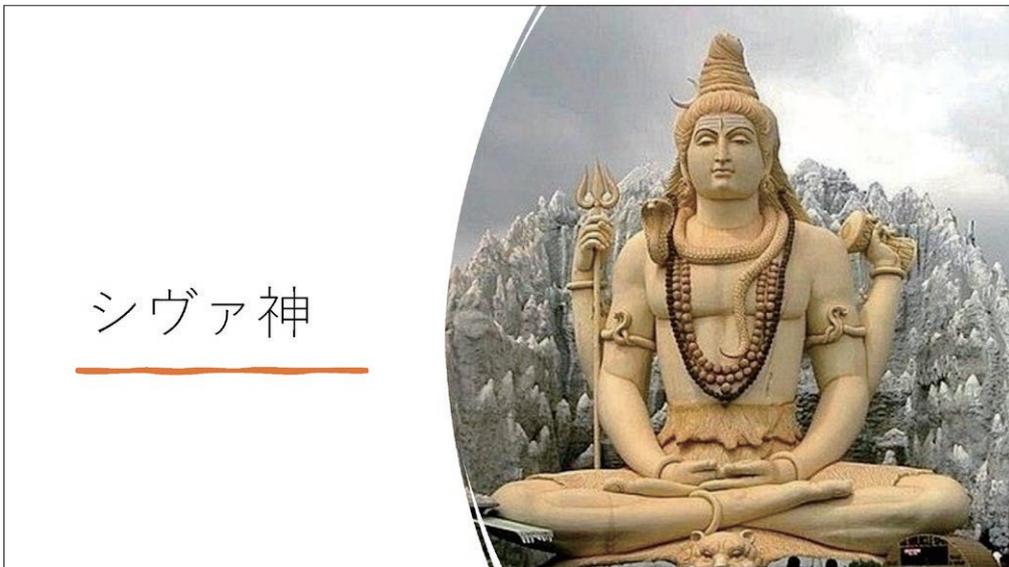


図 6



ハルマゲドン (世界最終戦争)

図 7



シヴァ神

図 8



自由都市
Próspera

図 9

ピーター・
ティールの
海上都市国
家



図 10

ノアの方舟



図 11

Rapture
(携挙)



図 12

対立

ヴァンス副大統領



グレタ・トゥーンベリ



図 13

上九一色村
(1995年)
出家者
コミュニティ



図 14

オウムとヘッドギア (PSI)



図 15

パノプティコン

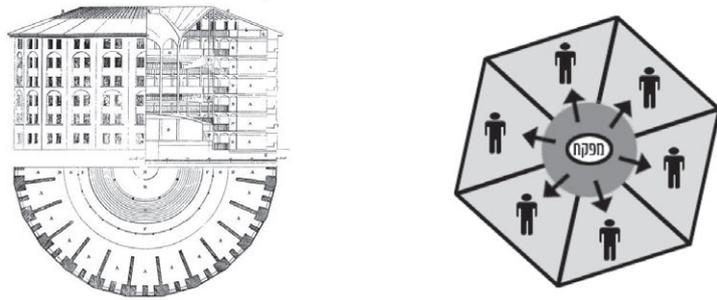


図 16

ロビンソン・クルーソーの洞窟



図 17

坂本堤弁護士一家殺害事件

坂本弁護士一家の碑（富山県魚津市）



長男の慰霊碑（長野県大町市）



図 18

極限的に直接的なコミュニケーション

新世紀エヴァンゲリオン



君の名は。

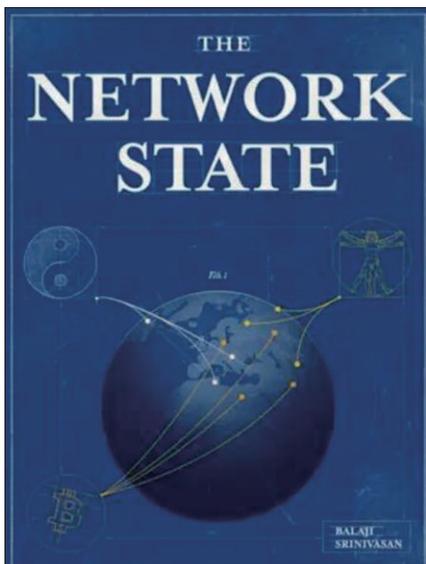


図 19

イーロン・マスク スネイルブルック



図 20



—
Balaji Srinivasan

The Network State: How to Start a New Country, 2022

図 21

講演 全体構成

- 1 抑圧されたものの回帰のように—オウム事件とトランプ現象
- 2 否定的な終末論
 - (1)オウム真理教の破壊的終末論
 - (2)終末型ファシズムとしてのトランプ現象
- 3 歴史なき国家
 - (1)トランプのガザ、オウムの上九一色村
 - (2)独房修行からヘッドギアへ—極限的な直接性
 - (3)歴史なき国家の構想

図 22